

戦国・江戸時代の神奈川

—小田原城とその支城から庶民の暮らしまで—

小田原市文化部文化財課
山口 剛志

はじめに

- ・戦国時代から江戸時代の神奈川について、発掘調査の成果を中心に説明する。
- ・戦国時代は、関八州を治めた小田原北条氏の本城である小田原城の様子を中心として、その支城についても紹介する。
- ・江戸時代は、城下町・宿場町であった小田原のほか、神奈川に遺された様々な種類の遺跡を紹介する。

1. 戦国・江戸時代とは

(1) 戦国時代

- ・日本史における戦国時代とは、延元元年(1336)～天正元年(1573)の238年間続いた中世後期の室町時代のうち、応仁元年(1467)に起きた応仁の乱以降から織田信長によって室町幕府が滅亡した天正元年(1573)までを指す(第1表)。
→ 本講座では、伊勢宗瑞(北条早雲)が明応5年(1496)～文亀元年(1501)の間に小田原城を奪取した以降の神奈川の戦国時代について説明する。

(2) 江戸時代

- ・日本史における江戸時代とは、織田信長によって室町幕府が滅亡した天正元年(1573)から始まる近世のうち、徳川家康が江戸に幕府を開いた慶長8年(1603)～慶応3年(1867)の265年間を指す。
- ・近世は、慶長8年(1603)までが安土桃山時代、それ以降が江戸時代に区分されるが、安土桃山時代前半の東国は、未だ戦国大名が領国支配している中世的な世界。
- ・この意味からいえば、東国における近世の幕開けは、天正18年(1590)の小田原北条氏滅亡を画期とするのが適当(永原1990)。
→ 本講座では、天正18年(1590)の小田原北条氏滅亡以降を近世とし、安土桃山時代も含めて江戸時代として説明する。

2. 戦国・江戸時代における神奈川の歴史

- ・現在の神奈川県は、戦国・江戸時代の相模国一国と武蔵国の橘樹(たちばな)郡・都筑(つづき)郡・久良岐(くらぎ)郡の三郡が該当(第1図)。

(1) 戦国時代(第2図)

- ・明応5年(1496)～文亀元年(1501)の間に、伊勢宗瑞(北条早雲)が大森氏から小田原城を奪取し、相模国西郡を領有。

- ・さらに、永正9年(1512)には、三浦氏が守る相模岡崎城を攻略して相模中郡・東郡を収め、永正13年(1516)には三崎城(新井城)を攻略して三浦氏を滅亡させ、相模一国を領有。
- ・二代氏綱は、大永3年(1523)までに横浜・川崎地域の武蔵国領を収め、以後、天正18年(1590)まで神奈川を小田原北条氏が領有。

(2) 江戸時代

- ・神奈川西部の酒匂川流域に位置する足柄上・下両郡と淘綾(ゆるぎ)郡の一部が小田原藩領、これより東部の神奈川が幕府直轄領・旗本領・藩領となった。
- ・神奈川東部の藩領とは、下総国関宿藩〔慶安元年(1648)～天和3年(1683年)に所領〕・下野国烏山藩〔享保13年(1728)から所領〕の飛地のほか、六浦藩〔元禄9年(1696)以降〕・荻野山中藩〔天明3年(1783)以降〕の所領があった。

3. 戦国時代の神奈川

(1) 小田原城

A. 小田原城の歴史(第2・3図)

(A) 大森時代〔応永23年(1416)～15世紀末〕

- ・現在の県立小田原高等学校付近に小田原城が形成された?
→ これまでの発掘調査で遺構・遺物がほとんどなく、考古学的に不明確な時代。

(B) 小田原北条時代〔15世紀末～天正18年(1590)〕

① 初代伊勢宗瑞(北条早雲)〔康正2年(1456)～永正16年(1519)〕

- ・明応7年(1498)に伊豆国、永正13年(1516)に相模国を平定。

② 二代北条氏綱〔長享元年(1487)～天文10年(1541)〕

- ・永正15年(1518)に家督を継承し、伊豆韮山城から小田原城を本城とした。
- ・大永3年(1523)に北条に改姓し、相模支配の正当性の確立を図った。
- ・天文6年(1537)に駿河国東部と武蔵国南部、天文7年(1538)に下総国の一部を平定。

③ 三代北条氏康〔永正12年(1515)～元亀2年(1571)〕

- ・天文10年(1541)に家督を継承し、天文20年(1551)頃に二の丸外郭が完成。
- ・天文15年(1546)に武蔵国全域、弘治元年(1555)に上総国・下総国の一部、永禄2年(1559)に上野国の一部を平定。

④ 四代北条氏政〔天文10年(1541)～天正18年(1590)〕

- ・永禄2年(1559)に家督を継承し、元亀2年(1571)頃までに低地部の三の丸外郭を造営。
- ・永禄4年(1561)に長尾景虎(上杉謙信)、永禄12年(1569)に武田信玄が小田原城を攻略。
→ いずれも籠城戦によって両者を退けた。
- ・天正5年(1577)に下総全域、下野・常陸の一部を平定。

⑤ 五代北条氏直〔永禄5年(1562)～天正19年(1591)〕

- ・天正8年(1580)に家督を継承し、丘陵部三の丸外郭・総構の完成。
- ・天正10年(1582)に下野南西部、上野・信濃の大部分、甲斐の一部を領有し、最大領土となる。
- ・天正18年(1590)、豊臣秀吉との小田原合戦に敗れた後、高野山へ追放。
- ・天正19年(1591)に関東と近江に1万石の所領を与えられるも29歳で没する。
→ 叔父氏規が家督を継承、小田原北条氏は河内狭山藩の大名として幕末まで存続。

B. 小田原城とその城下の暮らし

(A) 二の丸

① 御用米曲輪第2～7次調査 (写真1)

- ・礎石建物跡・池・石敷遺構・石敷井戸などを検出 (佐々木ほか2016)。
→ 中世小田原城の中心的な施設が存在する空間か。

(B) 三の丸

① 藩校集成館跡第I地点 (写真2)

- ・溝に囲まれた区画内に屋敷が造られた景観 (柳谷1984)。

② 山本内蔵邸第IV・VIII・XI・XIII地点

- ・障子堀に囲まれた区画内に屋敷が造られた景観 (諏訪間1990・木下ほか2006・佐々木2007・土屋2018)。

③ 大久保弥六郎邸跡第III地点 (写真3)

- ・石組側溝を伴う道路に沿って屋敷が並ぶ景観 (小山ほか2008)。

(C) 城下

① 欄干橋町遺跡第II地点

- ・南北に延びる石組水路が検出され、小田原用水に関連する施設の可能性 (諏訪間ほか1993)。
- ・西側の第X地点でも同様な石組水路が検出され (山口ほか2019)、両者の間隔36m。
→ 屋敷境を示す遺構の可能性。

② 欄干橋町遺跡第IV地点 (写真4)

- ・東海道側に柱穴・半地下式の倉庫・小田原用水関連の遺構、敷地奥にゴミ処理用の土坑 (山口ほか1998)。
→ 東海道側に屋敷、奥側に庭という土地利用。
- ・中国磁器・国産陶器・木製品など豊富な遺物が出土。
→ 当時の暮らしを考える上で重要な資料。

③ 本町遺跡第III地点

- ・城下にも障子堀に囲まれた区画内に屋敷が造られた景観 (諏訪間ほか2008)。

(D) 総構

① 伝肇寺西第I地点 (写真5)

- ・堀と土塁を同時に調査した事例 (山口ほか2004)。
- ・堀幅16.5m、堀底幅6.5m、深さ10mの大規模な堀。
- ・堀底は、小田原北条氏が積極的に採用した障子堀の形態。

(2) 小田原城の支城

- ・支城は、神奈川に位置する相模玉縄城・三崎城 (新井城)、武蔵小机城のほか、伊豆韮山城、武蔵江戸城・河越城の六城であり、相模津久井城、武蔵滝山城・勝沼城は小田原北条氏に従属する国人の本拠。

A. 玉縄城 (神奈川県鎌倉市)

- ・伊勢宗瑞 (北条早雲) が永正9年 (1512) に築いた、相模東郡と武蔵久良岐郡を併せた玉縄領の重要拠点となる支城。
- ・城主は、一門である氏綱の弟氏時や氏綱の三男為昌、氏綱の婿養子綱成など。
- ・昭和62年 (1987) の発掘調査では、堀・土塁のほか井戸・掘立柱建物跡などの居住空間を検出 (大河内ほか1994)。

B. 三崎城 (新井城) (神奈川県三浦市)

- ・伊勢宗瑞 (北条早雲) が永正13年 (1516) に三浦氏から奪取。
- ・房総半島や相模湾などの防衛に対応する水軍の拠点で、三浦郡を管轄する支城。

- ・城主は、一門である氏綱の三男為昌や氏康の四男氏規。
- ・平成4年(1992)の発掘調査では、大型掘立柱建物跡・大型竪穴状遺構・溝状遺構・大型土坑などを検出(武藤1997)。

C. 津久井城(神奈川県相模原市)(写真6)

- ・津久井領を治めていた内藤氏の居城で、甲斐との国境を守る重要拠点。
- ・大永3年(1523)までには、氏綱の支配下となったか。
- ・平成6年(1994)から継続的に発掘調査が行われ、本城曲輪周辺で堀や石積みの虎口・建物跡・門の礎石、屋敷跡群では建物跡・池状遺構などを検出(近藤ほか2005など)。

D. 河村城(神奈川県山北町)(写真7)

- ・直轄の城として、新城とともに駿河・甲斐との国境を守る重要拠点。
- ・平成元年(1989)から継続的に発掘調査が行われ、障子堀に区画された曲輪などが検出された城郭部や、館跡などが検出された根小屋の様子が判明(石丸ほか1992・1996)。
- ・このほか、小田原北条氏と関連のある16世紀まで機能した城郭では、藤沢市大庭城(寺田ほか1985)、松田町松田城(安藤文一1989)、平塚市真田城(河合ほか2003)、伊勢原市丸山城(河合ほか2002)などが調査されている。

4. 江戸時代の神奈川

(1) 小田原城

A. 小田原城の歴史

(A) 前期大久保時代〔天正18年(1590)～慶長19年(1614)〕

- ・天正18年(1590)の小田原合戦後、徳川家康旧来の家臣大久保忠世が4.5万石で城主。
- ・堀や石垣などを築造し、小田原城を改修していたことが近年明らかになってきた。
- ・その子忠隣は、慶長19年(1614)に改易され、小田原城は徳川家康・秀忠によって城門・櫓などの作事が破却された。

(B) 番城時代〔慶長19年(1614)～寛永9年(1632)〕

- ・城主不在の時代で、幕府が指名した譜代大名と旗本が交代で城番を務めた。
- ・元和5～9年(1619～23)の5年間は阿部正次が城主となるが、その後は再び城主不在。

(C) 稲葉時代〔寛永9年(1632)～貞享2年(1685)〕

- ・三代將軍家光の乳母である春日局の実子、稲葉正勝が8.5万石で城主。
- ・小田原城近世化工事に本格的に着手し、延宝3年(1675)までに完成。
- ・正通が貞享2年(1685)に越後国高田へ転封。

(D) 後期大久保時代〔貞享3年(1686)～明治4年(1871)〕

- ・大久保忠朝が10.3万石で城主となり、大久保氏が72年ぶりに復帰。
- ・元禄16年(1703)元禄地震、宝永4年(1707)富士山噴火による火山灰降下、文化14年(1817)小田原宿の大火、嘉永6年(1853)嘉永小田原地震などの相次ぐ災害のため、藩の維持が精一杯の時代。
- ・明治3年(1870)に廃城届を提出し、天守などが解体された。

B. 小田原城とその城下の暮らし

(A) 二の丸

① 二の丸御殿跡

- ・藩の政庁及び藩主の居館から、元禄16年(1703)元禄地震による火災跡を検出(大島1999)。

(B) 三の丸

① 藩校集成館跡第Ⅲ地点(写真8)

- ・17世紀は家老屋敷、18世紀は藩の役所、19世紀は藩校が置かれる(小林2002)。

- ・硯・水滴・筆置きなどの文房具が多く出土。
→ 藩の役所・藩校があったからか。
 - ・高級磁器「鍋島」の出土。 → 鍋島藩と小田原藩との交流の記録（神奈川県立博物館 1987）。
- ② 杉浦平太夫邸跡第Ⅳ地点・大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点（写真 9）
- ・17 世紀前半の土坑からマイルカ 3 体分の遺骸が出土し、肉を切り取った痕跡あり。
→ 当時の食文化を示す一例。
- ③ 大久保雅楽介邸跡第Ⅵ地点（写真 10）
- ・池跡から宝永 4 年（1707）富士山噴火に伴うスコリアとともに陶磁器・かわらけが出土（山口 2000）。
→ 年代の確かな資料として重要。

(C) 城下

① 欄干橋町遺跡第Ⅳ地点

- ・有力商人の屋敷地で、瓦や高級磁器が出土。
- ・遺構・遺物が多量に検出

② 欄干橋町遺跡第Ⅴ地点（写真 11）

- ・天保 3 年（1832）以前が「中村屋源兵衛」、それ以後が「竹本屋幸右衛門」の旅籠。
- ・磁器碗・皿のほか、徳利・餌入・灯明具・火消壺・土製基石・砥石・下駄など、豊富な遺物が出土（諏訪間ほか 1999）。
- ・かんざし・こうがいが多量に出土し、飯盛女（めしもりおんな）の飾り物か。

③ 筋違橋町遺跡第Ⅳ地点

- ・18～19 世紀の形吹きガラスの坏・ワインボトルや、滑石製落款 2 点など特殊な遺物が出土（小池 2011）。
→ 文人層が存在した可能性。

④ 筋違橋町遺跡第Ⅴ地点（写真 12）

- ・17 世紀中葉までの石組水路を伴う東海道の発見（渡辺 2010）。
- ・18 世紀後半～19 世紀の小田原用水から屋敷内へ水を引き込んだ木樋・竹樋を検出。

(2) 神奈川の近世遺跡

A. 宿場

① 厚木市東町二番遺跡

- ・大山詣で賑わった矢倉沢往還沿いに発展した厚木宿に位置し、近世の豪商の屋敷跡。
- ・平成 3 年（1991）に発掘調査が実施され、16 世紀の中世から近・現代までの屋敷の変遷や、近世に街道沿いの表側に店、奥側に土蔵が構築されたことが明らかになった（平本ほか 1995・1996）。
- ・このほか、東海道の藤沢宿・平塚宿においても発掘調査が行われている。

B. 村落

① 綾瀬市宮久保遺跡

- ・昭和 56～59 年（1981～84）に発掘調査が実施され、オモヤ・ナヤなどの掘立柱建物跡群と段切りを基本として、井戸・土坑・堅穴状遺構・柱穴などのいずれかの遺構が伴う 9 箇所（箇所）の屋敷跡と推定される遺構群が検出された（國平ほか 1988）。17 世紀後半～19 世紀前半の村落の変遷が明らかにされた。
- ・その後、清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡（市川ほか 1993）・表の屋敷遺跡（近野ほか 1997）や、逗子市池子遺跡群 No.7 地点（山本ほか 1997）などの近世村落を調査。

C. 寺院

① 清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡内長福寺址

- ・18世紀後半～19世紀の伽藍配置が復元されたほか、梵鐘鑄造遺構が検出された。『新編相模風土記稿』にある元文5年（1740）銘の梵鐘の可能性が高く、近世における梵鐘鑄造遺構の検出は全国的にも非常に珍しい（市川ほか1993）。

D. 生産遺跡

(A) 炭焼窯

- ① 清川村宮ヶ瀬遺跡群ナラサス北遺跡・北原（No.9）遺跡（写真13）
 - ・ナラサス北遺跡（上田ほか1991）で36基、北原（No.9）遺跡で15基検出。
 - ・斜面地をトンネル状に掘った横穴式土窯の形態。
 - ・炭焼窯の数から推定して、炭を商品として販売していた可能性。

(B) 酒造関連

- ① 清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場（No.6）遺跡
 - ・酒造関連遺構と推定される18世紀後半～19世紀代の竈跡を検出（鈴木ほか1995）。
 - ・近世に酒造が盛んであった兵庫県伊丹市伊丹郷町遺跡の酒米を蒸すための大形竈との類似性が指摘される（小長谷ほか1996）。
- ② 相模原市津久井城根小屋地区遺跡群（写真14）
 - ・18世紀後半以降と推定される大形竈のほか、周辺から検出された特殊竈穴・井戸・土蔵造り建物跡・礎石建物跡によって酒蔵を構成していた可能性が指摘された（池田ほか2004）。大形竈は、同じく伊丹郷町遺跡の大形竈と類似する。

(C) 水田

- ① 海老名市四大縄遺跡
 - ・中・近世の水田跡が5面検出され、東西道路（大畦畔）によって形成された大区画の中に畦畔で区割された水田跡が細かく分布し、第2面では田植時の横歩きした足跡と推定される窪みも検出された（齋木ほか1997・1998）。

(D) 石丁場

- ① 小田原市早川石丁場群関白沢支群（写真15）
 - ・慶長9年（1604）～寛永13年（1636）に江戸城を改修する際、幕府が諸大名に命じた「公儀御普請（こうぎごふしん）」により石垣を採石・加工した（山口ほか2015）。
 - ・石を割るための矢穴（やあな）や、「+」などの刻印がある安山岩の石材が多数分布するほか、石材を運び出すための石曳道（いしびきみち）が検出されている。
 - ・平成28年（2016）に熱海市・伊東市の石丁場とともに「江戸城石垣石丁場跡」として国指定史跡となった。

(E) 焼継

- ① 茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡（写真16）
 - ・破損した陶磁器を修復する焼継が施された陶磁器が多量に出土（大村ほか1997）。
 - ・焼継された陶磁器に所有者の地名と人名が朱書きされており、非常に多くの地名と人名が確認された。
 - 焼継師が預かって修復した陶磁器を何らかの理由で作業場の周辺に廃棄したと推定され、商売の活動範囲などの焼継師の実像に迫る上で貴重な資料。

(F) 墓地

- ① 横須賀市向井将監正方夫妻墓
 - ・知行2,000石の旗本であった向井将監正方は延宝2年（1674）没、その妻は寛文10年（1670）没という埋葬人物と没年が特定できる貴重な事例（中三川ほか2005）。
- ② 逗子市池子遺跡群第7地点
 - ・北側調査区で15世紀代の墓坑1基、17世紀後半～近代の墓坑51基を検出。
- ③ 秦野市東開戸遺跡
 - ・宝永4年（1707）以前の構築である積石塚が発掘調査され、積石下部の中央付近に

は小片化した焼人骨を検出（安藤 1992）。

(G) 街道

① 箱根町箱根旧街道

・昭和 55・63 年（1980・1988）に試掘調査が実施され、石畳を検出（伊藤 1984・1990、伊藤ほか 1987）。

② 箱根町箱根旧街道畑宿一里塚

・慶長 9 年（1604）に江戸日本橋を起点として旧東海道に整備された一里塚が、平成 10 年（1998）に 2 基を発掘調査（伊藤ほか 1999）。

・一里塚は、直径約 30 尺（9 m）の塚の下部周囲に石を円形に積み、その内部に礫を充填した上で塚全体に盛土していたことが判明（伊藤ほか 1999）。

(H) 台場

① 横浜市神奈川台場

・台場は、幕府が外国船防備のために設けた砲台。

・平成 19～20 年（2007～08）の発掘調査で、東京湾に造られた人工島の石垣や台場へ渡るための取渡り道を確認（鈴木ほか 2008・山田 2009）。

おわりに

・城郭などの支配した側の様子と、宿場・村落などの支配された側の様子とを総合的につなぎ合わせ、神奈川の戦国・江戸時代の歴史を復元することが大切。

用語解説

小田原用水：小田原北条時代の天文年間（1532～54 年）に、早川から小田原城下へ引き込んだ上水。当時は、東海道の中央を流れており、各敷地へは地中埋設の箱樋（はこどい）などで水を引いていた。

改易（かいえき）：身分を奪って領地を没収すること。いわゆるお取り潰し。

伽藍配置（がらんはいち）：寺院における塔や金堂などの建物の配置。

曲輪（くるわ）：堀・土塁などによって区画された城郭の平面空間。この曲輪が複数配置されて城郭を構成。

虎口（こぐち）：城の出入口のことで、通常は門などの防御施設を伴う。

作事（さくじ）：天守・櫓・門などの建築全般のこと。これに対し、普請（ふしん）は、堀・石垣の構築や曲輪の造成など土木工事全般を指す。

支城：本城（小田原城）とは別に、地域ごとに軍事力を配属させるなど支配の拠点とした城のことで、北条一門や重臣を配置した。なお、津久井城・滝山城・勝沼城などは、小田原北条氏に従属する国人の領域支配の拠点という意味において、小田原北条氏の支城とはいえない。

障子堀：堀底へ堀障子と呼ばれる堰堤（えんてい）状の仕切りを掘り残して設けた堀のこと。堀の水利調節や堀の中での軍勢の移動を妨げたりする機能があるとされる。小田原北条氏が積極的に採用した築城術。

水軍：水上の軍隊。小田原北条氏では三浦水軍と伊豆水軍が知られ、三浦水軍の拠点は三崎城（新井城）。

転封（てんぽう）：大名の領地を移すこと。国替（くにがえ）ともいう。

土塁：堀に沿って土を盛り上げて障壁とした防御施設。

鍋島：肥前鍋島藩が将軍家への献上や大名家・公家などへの贈答品として焼いた江戸時代の磁器製品。最も精巧な技術を駆使して作られた焼物であり、一般には販売されない特別あつらえの器であった。

西郡・中郡・東郡：永正 9 年（1512）伊勢宗瑞（北條早雲）設定の領域単位。西郡は酒匂川流域の足柄上・下両郡、中郡は相模川以西の大住・余綾（洵綾）両郡と愛甲郡南部、東郡は相模川以東の高座・鎌倉両郡。

根小屋（ねごや）：城郭の麓に形成された、城主や家臣などが平時に生活する場所。城下町の原型ともいわれる。

飯盛女（めしもりおんな）：旅籠で宿泊客の食膳接待をした仲居であるが、実際には宿泊客の夜の接待をする娼婦としても働いていた。小田原宿では、文化 3 年（1806）に小田原藩が設置許可を出した。

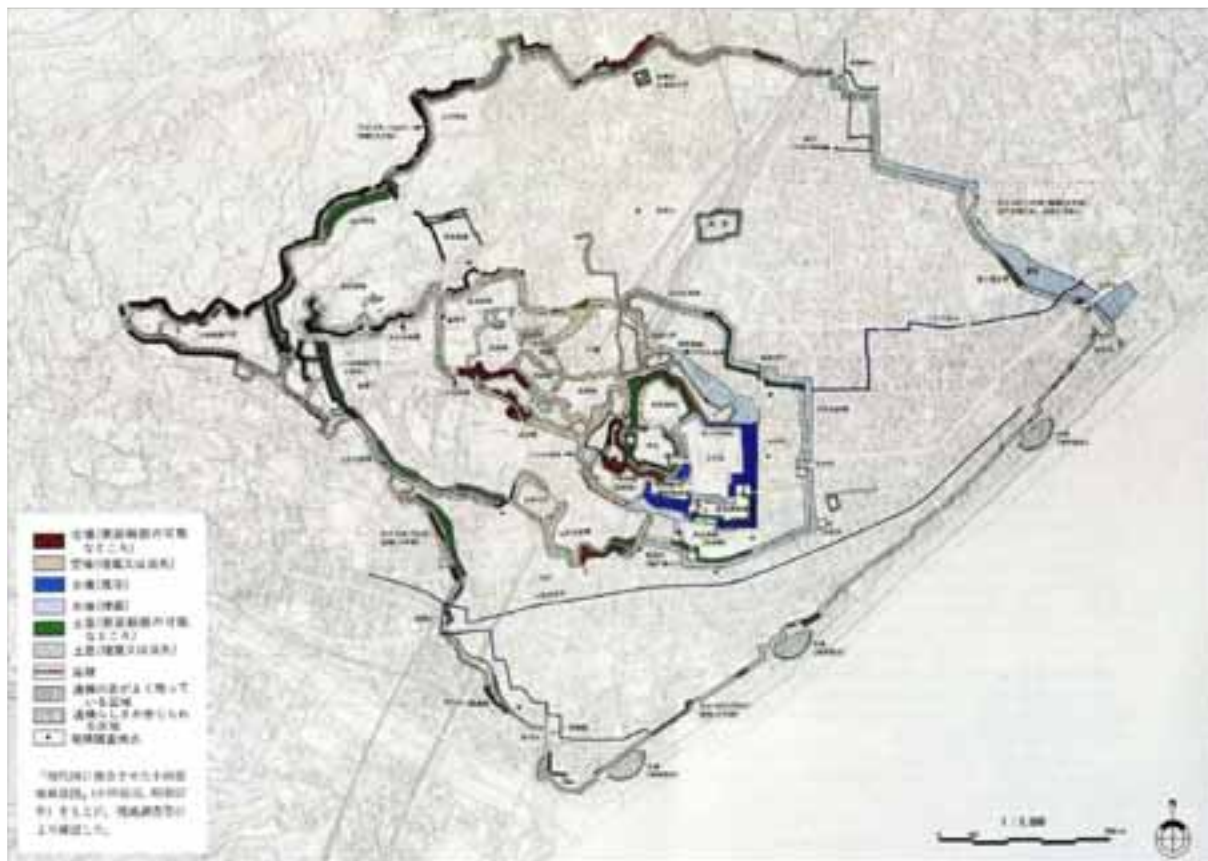
焼継（やきつぎ）：白玉とよばれるガラス質の接着剤を熱で溶かし、破損した陶磁器を修復する技法。江戸時代 18 世紀末以降に普及し、陶磁器には焼継師が識別するために所有者の地名と人名が朱書きされている。

引用・参考文献（下線の文献は参考となる図書）

- 安藤文一 1989 『松田城址』
- 安藤文一 1992 「秦野市東開戸遺跡の調査」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 池田治ほか 2004 『津久井城根小屋地区遺跡群』かながわ考古学財団調査報告 166
- 石丸熙ほか 1992 『河村城跡』
- 石丸熙ほか 1996 『河村城関連遺跡』
- 市川正史ほか 1993 『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅲ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21
- 伊藤潤 1984 「箱根旧街道石畳埋蔵確認調査報告」『箱根町文化財研究紀要』第15号
- 伊藤潤 1990 「箱根旧街道Ⅱ」『箱根町文化財研究紀要』第20号
- 伊藤潤ほか 1987 「箱根旧街道」『箱根町文化財研究紀要』第18号
- 伊藤潤ほか 1999 『箱根旧街道畑宿一里塚保存整備事業報告書』
- 上田薫ほか 1991 『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅱ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21
- 大河内勉ほか 1994 『玉縄城跡発掘調査報告書』
- 大島慎一 1999 『史跡小田原城跡二の丸御殿跡試掘調査の概要』小田原市文化財調査報告書第76集
- 大村浩司ほか 1997 『上ノ町・広町遺跡』
- 小笠原清ほか 1995 『小田原市史』別編城郭
- 小田原城総合管理事務所編 2019 『戦国大名北条氏の歴史—小田原開府500年のあゆみ—』
- 小田原城天守閣 2017 『小田原城天守閣特別展 小田原北条氏の絆—小田原城とその支城—』
- 小田原城天守閣 2018 『小田原城天守閣特別展 小田原開府五百年—北条氏綱から続くあゆみ—』
- 小長谷正治ほか 1996 「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究』Ⅳ
- 神奈川県地名編集委員会 1999 『神奈川県地名』日本歴史地名大系 14
- 神奈川県立博物館 1987 『鍋島—藩窯から現代まで』
- 河合英夫ほか 2002 『成瀬第二地区遺跡群下糟屋C地区第1地点、下糟屋D地区、丸山E地区発掘調査報告書』
- 河合英夫ほか 2003 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』4
- 木下正史ほか 2006 『小田原城三の丸遺跡—山本内蔵邸跡第Ⅷ地点—』
- 國平健三ほか 1988 『宮久保遺跡』Ⅱ、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 15
- 小池 聡 2011 『小田原城下筋違橋町遺跡第Ⅳ地点』
- 小林義典 2002 『小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第100集
- 小山裕之ほか 2008 『小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第Ⅳ地点・大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点』
- 近藤英夫ほか 2005 『津久井城の調査2』
- 齋木秀雄ほか 1997・1998 『四大縄遺跡』
- 財団法人かながわ考古学財団編 2010 『掘り進められた神奈川の遺跡 旧石器から近代まで』
- 佐々木健策 2007 「小田原城三の丸山本内蔵邸跡第ⅩⅠ地点」『平成19年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 佐々木健策ほか 2016 『史跡小田原城跡御用米由輪発掘調査概要報告書』小田原市文化財調査報告書第179集
- 鈴木重信ほか 2008 「神奈川台場」『第32回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 鈴木次郎ほか 1995 『宮ヶ瀬遺跡群』Ⅴ、かながわ考古学財団調査報告 4
- 諏訪間順 1990 「小田原城・三の丸遺跡（難波齒科地点）の調査」『小田原城とその城下』
- 諏訪間順ほか 1993 『小田原城下欄干橋町遺跡』小田原市文化財調査報告書第42集
- 諏訪間順ほか 1999 『小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅴ地点』小田原市文化財調査報告書第71集
- 諏訪間順ほか 2008 『小田原城下本町遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第146集
- 近野正幸ほか 1997 『宮ヶ瀬遺跡群』ⅩⅢ、かながわ考古学財団調査報告 19
- 土屋健作 2018 「小田原城三の丸山本内蔵邸跡第ⅩⅡ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地点」『平成30年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 寺田兼方ほか 1985 「藤沢市大庭城址公園内遺跡の調査」『第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 永原慶二 1990 「東国における中世の終焉と近世の幕あけ」『小田原城とその城下』
- 中三川昇ほか 2005 『向井将監正方夫妻墓調査報告』横須賀市文化財調査報告書第41集



第 2 図 小田原北条氏五代領国範囲図 (小田原城総合管理事務所編 2019)



第 3 図 小田原城城域図 (渡辺定夫 1990 を一部改変)



写真1 御用米曲輪第2号池 (佐々木ほか 2016)



写真2 藩校集成館跡第I地点方形区画溝 (柳谷 1984)



写真3 大久保弥六郎邸跡第III地点1号石積側溝付き道路 (小山ほか 2008)



写真4 欄干橋町遺跡第IV地点中国磁器 (山口ほか 1998)



写真5 総構伝肇寺西第I地点障子堀 (山口ほか 2004)



写真6 津久井城御屋敷敷虎口 (近藤ほか 2005)



写真7 河村城小郭と障子堀



写真8 藩校集成館跡第III地点色絵鍋島 (小林 2002)



写真9 大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点マイルカ遺骸
(小山ほか 2008)



写真10 大久保雅楽介邸跡第Ⅵ地点肥前磁器
(山口 2000)



写真11 欄干橋町遺跡第Ⅴ地点かんざし・こうがい
(諏訪間ほか 1999)



写真12 筋違橋町遺跡第Ⅴ地点上水施設



写真13 宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9) 遺跡炭焼窯 (市川
ほか 1993)



写真14 津久井城根小屋地区遺跡群酒造関連大型竈
(池田ほか 2004)



写真15 早川石丁場群関白沢支群矢穴・刻印石材
(山口ほか 2015)



写真16 茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡焼継資料 (大村
ほか 1997)